坂尻遺跡

—昭和57年度㈱大庭塗装工業所北原川作業所建設工事に伴う緊急発掘調査概報—

1983

袋井市教育委員会

例　　言

1. 本概報は、㈱大庭塗装工業所北原川作業所建設工事に伴い袋井市教育委員会が実施した緊急発掘調査の概報である。
2. 発掘調査は、昭和57年６月10日から３月31日まで実施した。
3. 現地調査は前田庄一が担当した。
4. 本概報に掲載した遺物実測図のうち土器は前田庄一が、石器は松井一明が実測を行なった。
5. 本概報の執筆・編集は前田庄一が行なった。
6. 本調査に関する事務は袋井市教育委員会社会教育課が行なった。
7. 発掘調査資料はすべて袋井市教育委員会が保管している。

目　　次

第１章　序　　説……1
　第１節　調査にいたる経過……1
　第２節　調査体制・方法……1
　第３節　歴史的環境……3
第２章　遺　　構……4
　第１節　古墳時代の遺構……4
　第２節　奈良時代の遺構……8
　第３節　平安時代～鎌倉時代の遺構……10
第３章　遺　　物……15
　第１節　古墳時代の土器……15
　第２節　奈良時代の土器……18
　第３節　平安時代～鎌倉時代の土器……18
　第４節　石　　器……18
第４章　まとめにかえて……24

挿　図　目　次

第１図　グリッド設定図…… 1
第２図　坂尻遺跡周辺主要後期古墳分布図…… 2
第３図　ＳＤ１・２土層断面図…… 4
第４図　遺 構 全 体 図…… 5
第５図　ＳＫ１・ＳＫ２実測図…… 7
第６図　ＳＩ１実測図…… 7
第７図　ＳＢ１実測図…… 8
第８図　ＳＢ２実測図…… 9
第９図　ＳＡ１実測図……10
第10図　ＳＢ３・ＳＢ４実測図……11
第11図　柵 列 実 測 図……13
第12図　土 坑 実 測 図……14
第13図　出土土器実測図（１）……19
第14図　出土土器実測図（２）……20
第15図　出土土器実測図（３）……21
第16図　出土土器実測図（４）……22
第17図　出土石器実測図……23

図　版　目　次

図版１　調査区全景　完掘状況（東より）
Ⅱ・ⅢＤ区、Ⅱ・ⅢＥ区、Ⅱ・ⅢＦ区完掘状況（西より）
図版２　ＳＤ３全景（南より）
ＳＤ３内遺物出土状況（ⅢＥ－１区、東より）
図版３　ＳＢ１近景（南より）
ＳＢ２近景（南より）
図版４　ＳＢ３・ＳＢ４遠景（東より）
ＳＢ３近景（北より）
ＳＢ４近景（北より）

第１章　序　　説

第１節　調査にいたる経過

昭和56年の末、㈱大庭塗装工業所より、袋井市国本地内に工場を建設したいとの連絡が袋井市教育委員会にあった。袋井市教育委員会は、工場建設予定地が、古墳時代～中・近世の複合遺跡である坂尻遺跡の北西に位置するため、試掘調査を実施した。その結果、工場用地全域にわたり古墳時代から奈良時代にかけての遺物包含層が確認された。

この試掘調査の結果から、袋井市教育委員会は、事前の発掘調査が必要であるとの結論に至り、㈱大庭塗装工業所と、費用負担、調査面積等について協議を重ねた。

協議の結果、昭和57年度発掘調査を実施することとなった。

第２節　調査体制・方法

ｉ）調査体制

調査指導機関　静岡県教育委員会文化課　堀田良雄（同文化課指導主事）

調査担当者　吉岡伸夫（袋井市教育委員会社会教育課）

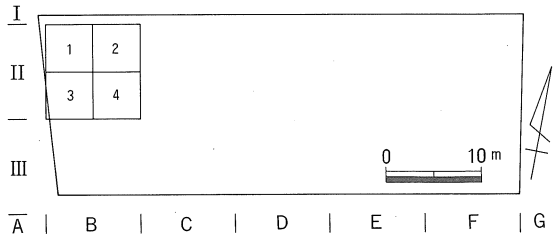
調　査　員　前田庄一

調査補助員　平賀太（奈良大学学生）、鈴木基能（武蔵工業大学学生）、小松敏明（国学院大学学生）

発掘作業員　足立貞一、山崎雪江、石川はな、田代すえ子、岡田あき、丹羽みどり、増井まさ子、村松義江、中野ふみ子、石川里子、寺田しま

ii）調査方法

発掘調査に当たり、１辺10mの大グリッド、この大グリッドを４分割した１辺５mの小グリッドを設定して、小グリッドごとに図面の作成・遺物の取り上げを行なうことにした。まず、工場用地の南西隅の測量杭を原点にした。原点から、磁北に対し10°－７′－15″西偏するラインを南北の基準線にした。この基準線から90°振った線を東西の基準線とした。そして、南からⅢ区、Ⅱ区、Ⅰ区、東西は、原点から東へＢ区……Ｇ区まで設定した。この組み合わせが大グリッド名で、小グリッドはアラビア数字で呼称した。グリッド名は、ⅡＢ－１区等、表記した。



第１図　グリッド設定図

第２図　坂尻遺跡周辺主要後期古墳分布図

1　睦実古墳群　2　前ノ山古墳群　3　谷口古墳群　4　観音堂横穴群　5　比丘尼古墳群　6　院内古墳群　7　崇信寺古墳群　8　宇刈横穴群　9　川田古墳群　10　道ケ谷ｂ横穴群　11　長福寺境内古墳群　12　宮坂横穴群　13　楠ケ谷ａ横穴群　14　東側古墳群　15　金谷Ａ・Ｂ横穴群　16　菅ケ谷横穴群　17　坂尻遺跡　18　岡津Ａ横穴群　19　岡津Ｂ横穴群　20　本村Ｂ横穴群　21　本村Ａ横穴群　22　城山横穴　23　地蔵ケ谷横穴群　24　金山横穴群　25　長者平古墳群　26　山本山古墳群・横穴群

第3節　歴史的環境

今回の調査では、古墳時代後期、奈良時代、平安時代～鎌倉時代の遺構を検出したが、古墳時代後期に属する遺構、遺物が、他の時期を圧倒している。

ここでは、中遠地域における古墳時代後期の墓制について若干述べてみる。

森町から袋井、掛川にいたる地域の古墳時代後期の墓制には、横穴式石室墳と横穴墓がある。横穴式石室墳から成る群集墳は、袋井市の小笠沢川流域（長者平古墳群等）、森町戸綿から飯田にかけての丘陵地帯（睦実古墳群、院内古墳群等）、掛川市の垂木川上流（東側古墳群等）、原野谷川上流（長福寺境内古墳群等）に分布する。一方、横穴墓は、森町睦実（観音堂横穴群等）、袋井市宇刈（宇刈横穴群）、菅ケ谷（菅ケ谷横穴群）、高尾（地蔵ケ谷横穴群）、掛川市下垂木（金谷横穴群等）、本郷（宮坂横穴群等）、曽我（本村Ａ・Ｂ群等）、岡津（岡津Ａ・Ｂ群）等に主に分布する。

これらの地域のうち、森町睦実（谷口古墳群と観音寺・観音堂横穴群、院内古墳群と梶ケ谷横穴群）、袋井市下山梨～久能（川田古墳群と道ケ谷Ａ・Ｂ横穴群）、掛川市本郷（長福寺境内古墳群と長福寺脇下横穴群）等では、横穴式石室墳と横穴墓が併存している。

坂尻遺跡に最も近い群集墳は菅ケ谷横穴群で、坂尻遺跡の北北西約２kmに位置する。菅ケ谷横穴群は現存約100基を数える横穴群で、主に尖頭形横穴から構成される。

尖頭形横穴は、森町、袋井市、掛川市にかけて分布しているが、縦長タイプと横長タイプの２種類が存在する。縦長タイプには森町観音堂、袋井市宇刈、地蔵ケ谷、掛川市楠ケ谷、金谷飛鳥横穴群等が該当し、横長タイプには袋井市菅ケ谷、掛川市岡津Ｂ群、本村Ｂ群が該当する。

横穴の玄室平面形が縦長、横長を呈するのは何に基づくのであろうか。

まず、縦長タイプの観音堂横穴群を見てみる。観音堂横穴群は計23基調査されているが、玄室長と奥壁幅の両方とも計測可能な19基の玄室長と奥壁幅の平均値を出すと、玄室長2.93m、奥壁幅1.64mとなる。横長タイプの岡津Ｂ群では（ミニ横穴の３号、５号、16号は除く）、玄室長2.1m、奥壁幅1.7mとなる。

次に埋葬施設を比較してみる。観音堂では、箱形石棺１例、礫床13例がある。箱形石棺は側壁沿いに、礫床13例は縦長11、横長１、不明１となっている。このことからすれば、観音堂では、遺骸を主軸と平行に側壁沿いに安置したものと考えられる。

岡津Ｂ群では、棺座が埋葬施設として用いられている。棺座は８基の横穴に計９例認められる。９例のうち８例は横長で、縦長は１例のみである。したがって、岡津Ｂ群では、遺骸を主軸と直交する形で安置したものと考えられる。

菅ケ谷横穴群中にも奥壁沿いに棺座を造りつけているものが多く存在しており、岡津Ｂ群と同様の安置方法をとったものと考えられる。

横長タイプの横穴は、袋井市東部から掛川市南部に分布が集中しており、掛川市南部から小笠郡下にかけて広く分布するドーム形横穴との関わりについて検討されなくてはならないものと考える。

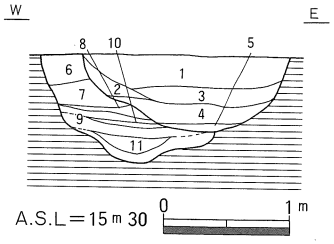
第２章　遺　　構

第１節　古墳時代の遺構

ｉ）溝状遺構

ＳＤ１

ＳＤ２の下層から検出された溝で、ＳＤ２により切られている。確認面からの深さ約85cmを測る。溝内の堆積土は、上から、６層黄褐色土、７層黄灰色粘土、８層灰色砂質粘土、９層暗灰色粘土、10層灰色粘土、11層暗灰色粘土となる。11層中には、炭と灰が多量に混じっていた。出土遺物がなく、時期は不明であるが、ＳＤ２よりは古い。したがって、古墳時代後期以前の溝である。



第３図　ＳＤ１・２土層断面図

ＳＤ２

ＩＢ－３、ⅡＢ－１、ⅡＡ－２区で検出された、発掘区の北西隅を斜めに走る溝である。確認面の幅約1.65m、深さ約60cmを測る。ＳＤ２が北東から南西に流れ、ＳＤ３が北西から南東方向に流れるものと思われ、調査区の北側で合流している可能性をもつ。ＳＤ２の溝底は、ＳＤ３の溝底より約40cm低くなっていることからすれば、ＳＤ３は、ＳＤ２から流れ出る溝と考えることも可能である。溝内の堆積土は、上から１層灰褐色砂質土、３層黄灰色砂質土、２層黄色粘土、４層灰色砂、５層黄色砂、から成る。土器は、３層と４層の上面から多く出土している。また、炭化米が出土している。

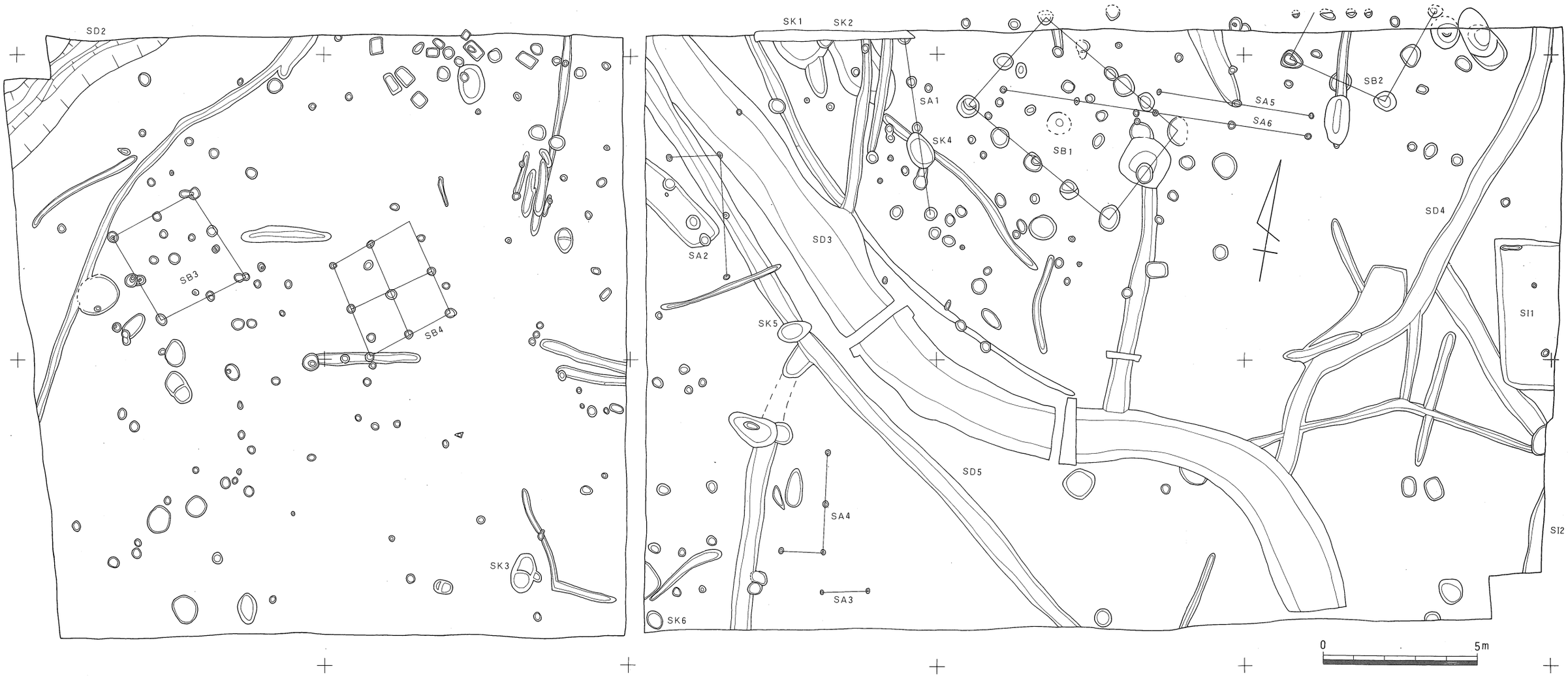
ＳＤ３

ＩＤ－３区からⅢＦ－３区にかけて検出された溝で、北西方向から南東方向へ流れるものと思われる。ＩＤ－３区からⅡＤ－４区までは直線的に南東方向に伸びるが、ⅢＤ－２区あたりからゆるく東に向き変え、ⅢＥ－２区、ⅢＦ－１区から屈曲して南に流れる。確認面の幅約２m、深さ約50cmを測る。

溝内からは、須恵器、土師器、砥石が出土している。また、径25～30cmを計る礫が、溝の底面から出土している。礫は溝内全域から出土したが、単独で存在し、群集することはない。これほど大きい礫は、包含層、他の遺構からは出土していない。この礫は、周辺の丘陵から運ばれてきたものと思われるが、用途については不明である。礫については、調査の不手際から、ⅢＦ－４区の集水桝を埋め戻す際に、集水桝内に投棄してしまった。

ＳＤ４

ＩＦ－４区からⅢＦ－１区にかけて検出された溝で、ＳＤ３に流入する。確認面の幅約70cm、深さ約20cmを測る。この溝も、ＳＤ３同様、蛇行しており、ⅡＦ－４区あたりで向きを西南西に変え、ⅢＦ－１区で、また向きを南南西に転ずる。


SD2
SB3
SB4
SK3
SK1
SK2
SA1
SK4
SB1
SA5
SA6
SB2
SD4
SA2
SD3
SK5
SI1
SD5
SA4
SI2
SA3
SK6
0
5m

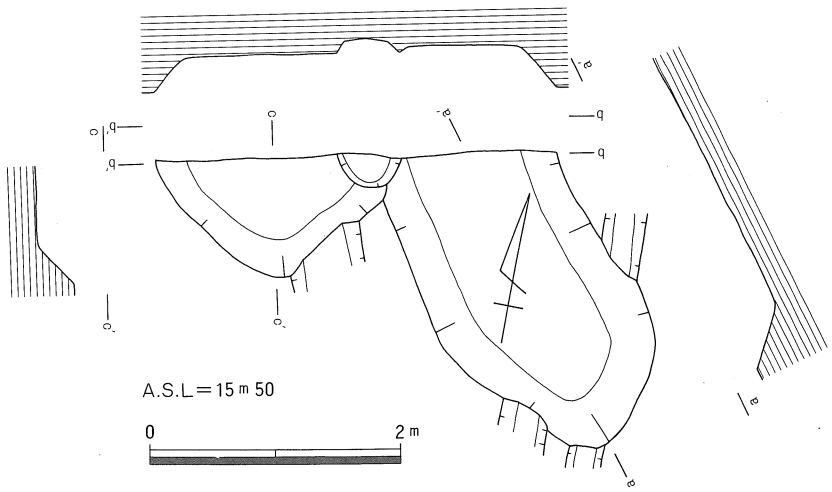
第4図　遺　構　全　体　図

ii）土　坑

ＳＫ１

ＩＤ－３区、ⅡＤ－２区で検出された。東西約1.85m、南北約95cm、深さ約30cmを測る。土坑の北端は、調査区域外にのびる。

青灰色粘土を覆土とする。



第５図　ＳＫ１・ＳＫ２実測図

ＳＫ２

ＩＤ－４区、ⅡＤ－２区で検出された。東西約1.4m、南北約2.6m、深さ約35cmを測る。土坑の北端は、調査区域外にのびる。

土坑内には、暗灰色粘土が厚く堆積しているが、底面上に約２cmの厚さで淡灰色粘土が堆積している。覆土中に土器の細片が多く混じる。

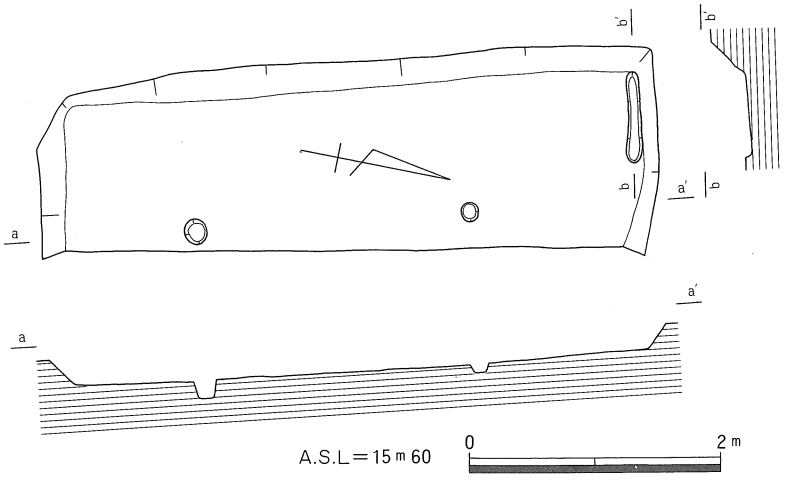
iii）竪穴状遺構

ＳＩ１

ⅡＦ－４区、ⅢＦ－２区で検出された。東西約1.5m、南北約4.85mを測る。遺構の東半分は調査区域外にのびる。遺構の北西隅に、長さ約75cm、幅約10cm、深さ約５cmを測る溝が検出された。

ＳＩ２

ⅢＦ－２・４区で検出されたが、大部分は調査区域外に位置するため詳細は不明である。深さ５cmを測る。



第６図　ＳＩ１実測図

第2節　奈良時代の遺構

i）溝状遺構

ＳＤ５

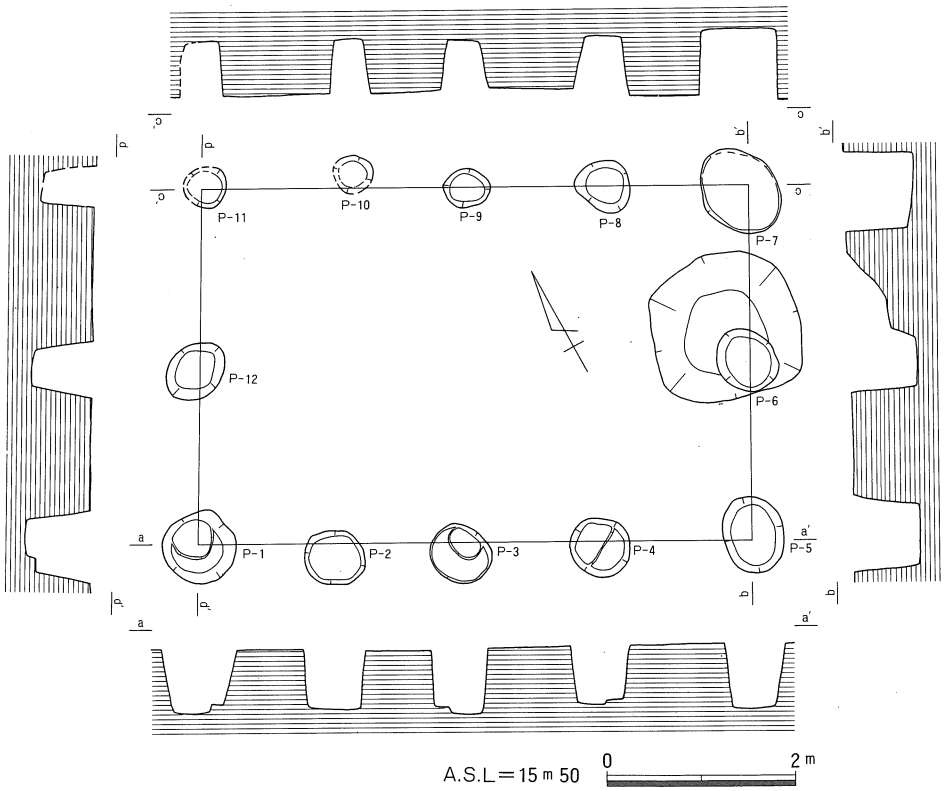
ＩＣ－４区からⅢＥ－３区にかけて検出された、北西方向から南東方向に流れるものと思われる。確認面の幅約70cm、深さ約５cmを測る。覆土中より馬歯と思われるものが出土している。

ii）掘立柱建物

ＳＢ１

ＩＥ－３、ⅡＥ－１、２、４区にかけて検出された、桁行４間、梁間２間の東西棟の建物と思われる。主軸方位は、Ｎ－61°－30′－Ｗをはかる。桁行の柱間はＰ－４とＰ－５の間、Ｐ－10とＰ－11の間が広く、約1.6mを測る。Ｐ－９とＰ－10の間は、1.2mと狭くなるが、他は1.35～1.45mを測る。梁間は、1.85～1.9mを測る。したがって、桁行5.8m、梁間3.75mを測る。

柱穴の掘方は、円形・楕円形を呈する。掘方の径は、四隅（Ｐ－11は、発掘区の限界で検出されたため不明）に位置するＰ－１、Ｐ－５、Ｐ－７は、径80cm～１mを測る大形であるが、他の柱穴は、径40～65cmとひと回り小振りである。柱穴の深さは、特に四隅の柱穴が深くなることはなく、すべて60～75cmを測る。



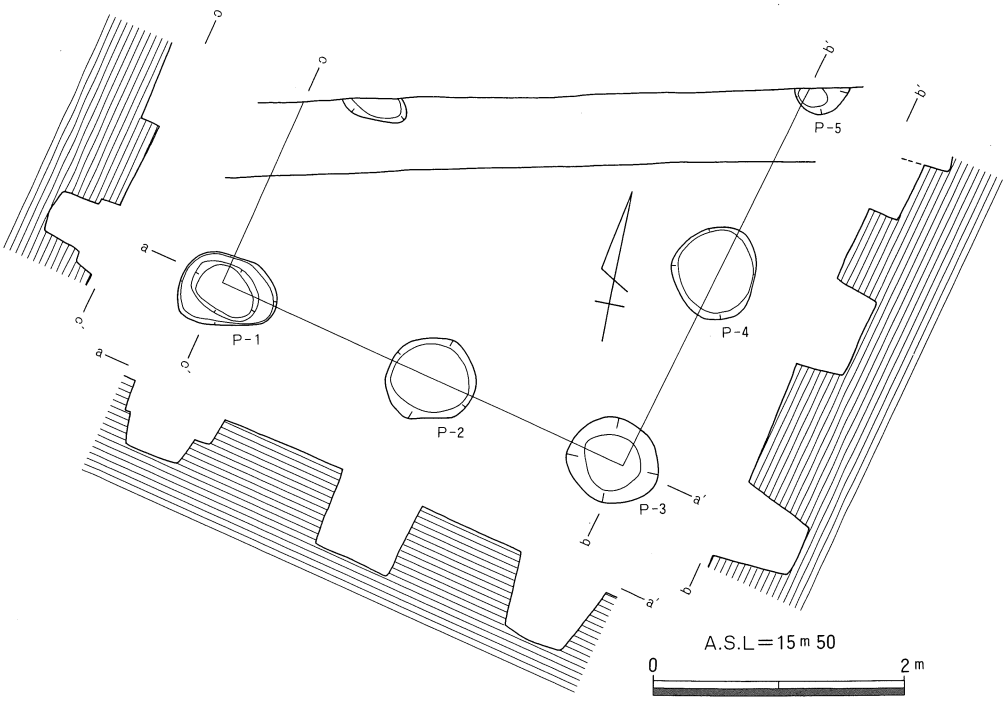
第７図　ＳＢ１実測図

P－3からは、柱根と思われる木片が出土している。また、P－1、P－12では、柱穴内の土層断面観察で柱痕跡を確認しており、P－1で柱の径約15cm、P－12で約10cmと推定される。

SB2

IF－3・4、IIF－1・2区にかけて、東西2間、南北2間分の柱穴を検出しており、南北棟の建物を想定できる。南北方向については、調査区域外にのびるものと思われる。主軸方位は、N－15°－30′－Eを測る。柱間は、桁行で約1.7m、梁間で約1.75mを測る。

柱穴の掘方は、円形・楕円形を呈し、径は、P－1が約80cm、P－2～4は、70～75cmを測る。SB2では、隅の柱穴が特に大きくなることはない。柱穴の深さは、P－4が約35cm、P－1が約50cm、P－2・3は約60cmを測る。



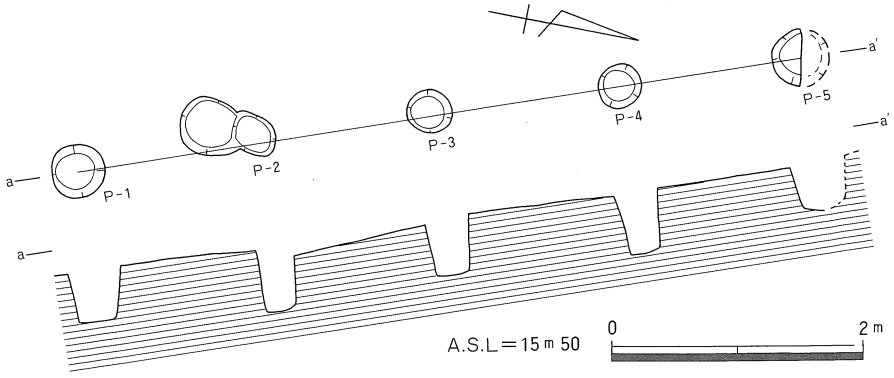
第8図　SB2実測図

iii) 柵　　列

SA1

ID－4、IID－2・4区にかけて4間分を検出したが、北側の調査区域外にのびる可能性をもつ。主軸方位は、N－19°－Wを測る。柱間は、1.4～1.5mを測る。この数値は、SB1の桁行の柱間の数値に近いものである。

柱穴の掘方は、P－2が楕円形を呈するが、他は円形を呈する。径は35～45cmを測り、深さは、40～50cmを測る。



第9図　ＳＡ１実測図

第３節　平安時代～鎌倉時代の遺構

ｉ）掘立柱建物

ＳＢ３

ⅡＢ－２・３・４区にかけて検出された、東西２間、南北２間の掘立柱建物であるが、桁行と梁行の判断はつかない。東西棟の建物と考えれば、主軸方位は、Ｎ－48°－30′－Ｅを測ることになり、南北棟の建物と考えれば、主軸方位はＮ－44°－30′－Ｗを測ることになる。柱間にはばらつきがあり、Ｐ－１・２間で約1.7m、Ｐ－２・３間で約1.35m、Ｐ－３・４間で約1.85m、Ｐ－４・５間で約1.4m、Ｐ－５・６間で約1.5m、Ｐ－６・７間で約1.5m、Ｐ－７・８間で約1.5m、Ｐ－８・１間で約1.6mを測る。Ｐ－１・Ｐ－３間とＰ－５・Ｐ－７間で約３m、Ｐ－７・Ｐ－１間で約3.1mを測り、正方形に近いが、Ｐ－３・Ｐ－５間は約3.3mを測り、若干いびつな建物となる。

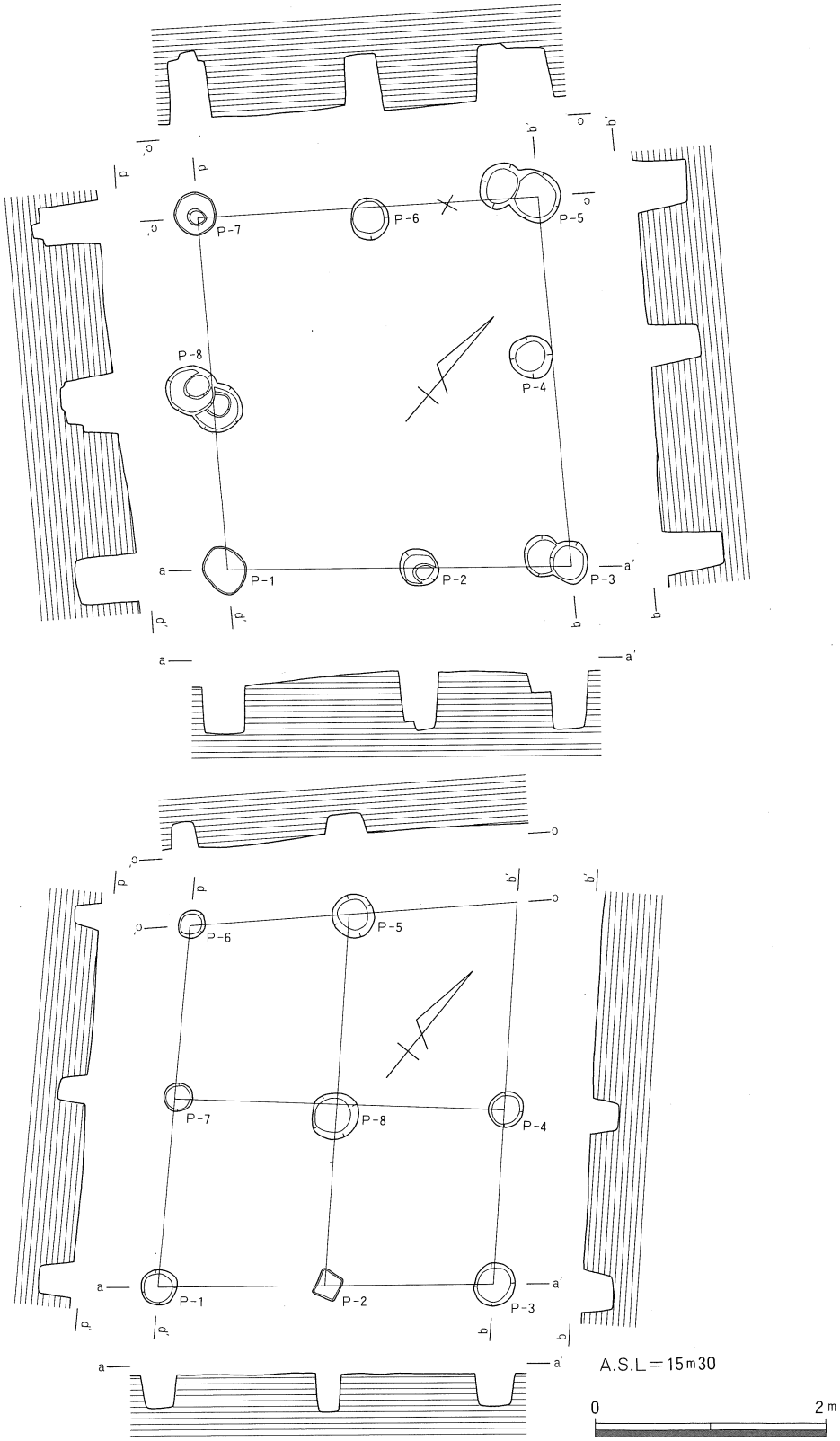
柱穴の掘方は、円形・楕円形を呈する。掘方の径は、35～50cmを測り、深さは、45～55cmを測る。柱穴の覆土は暗灰色粘質土である。

ＳＢ４

ⅡＣ－３区で検出された、東西２間、南北２間の総柱の掘立柱建物と思われるが、北隅の柱穴は検出されなかった。桁行と梁行の判断はつかない。東西棟の建物とすれば、主軸方位は、Ｎ－49°－Ｅを測ることになり、南北棟の建物とすれば、主軸方位は、Ｎ－34°－30′－Ｗを測ることになる。柱間は、Ｐ－７・Ｐ－１間とＰ－５・Ｐ－８間が約1.7m、Ｐ－２・Ｐ－８間が約1.6m、他は、1.45～1.55mを測る。

柱穴の掘方は、Ｐ－10が方形を呈するほかは円形を呈する。掘方の径は、25～40cmを測り、深さは、20～35cmを測る。Ｐ－１・Ｐ－３間で2.95m、Ｐ－６・Ｐ－１間で3.2mを測る。

検出された８つの柱穴のうち、Ｐ－１、Ｐ－２、Ｐ－３、Ｐ－６の覆土上層には、炭混じりの暗灰色粘土が堆積している。



第10図　ＳＢ３・ＳＢ４実測図

ii）柵　　列

暗灰色粘土を覆土とする柱穴列を6条検出した。暗灰色粘土を覆土とすることから、平安時代～鎌倉時代の遺構と考えられる。

ＳＡ2

ⅡＤ－1・3区で検出された、東西1間、南北2間の柱穴列で「┐」型を呈する。東西の柱穴列は南北の柱穴列に対し直角に取り付く。主軸方位は、N－12°－30′－Wを測る。柱間は、Ｐ－1とＰ－2間、Ｐ－2とＰ－3間が約2m、Ｐ－3とＰ－4間は約1.65mを測る。

柱穴の掘方は円形を呈し、径は約20cm、深さ20～30cmを測る。

ＳＡ3

ⅢＤ－4区で検出された、東西1間の柱穴列で、主軸方位は、N－77°－30′－Eを測る。ＳＡ4の南約1.3mに位置する。柱間は約1.5mを測る。

柱穴の掘方は円形を呈し、径約15cm、深さ15～20cmを測る。

ＳＡ4

ⅢＤ－2・4区で検出された、東西1間、南北2間の柱穴列で「└」型を呈する。東西方向の柱穴列は、南北方向の柱穴列の南端に直角に取り付く。主軸方位は、N－8°－Wを測る。柱間は、Ｐ－1とＰ－2間が約1.4m、Ｐ－2とＰ－3間が約1.55m、Ｐ－3とＰ－4間が約1.7mを測る。したがって、ＳＡ2と形態は同じであるが、柱間はＳＡ2より狭くなっている。

柱穴の掘方は円形を呈し、径約15～20cm、深さは、Ｐ－1が約10cm、Ｐ－2が約15cm、Ｐ－3が約30cm、Ｐ－4が約20cmを測る。

ＳＡ5

ⅡＥ－2、Ⅱ－1区で検出された、東西2間の柱穴列で、主軸方位は、N－89°－Eを測る。ＳＡ6の北側に、約50cmの間隔をおき平行に走る。柱間は、約2.5mを測る。

柱穴の掘方は楕円形を呈し、径は、両端の柱穴が約20cm、中央の柱穴はひと回り大きく約25cmを測る。深さは、両端の柱穴で約30cm、中央の柱穴で約40cmを測る。

ＳＡ6

ⅡＥ－1・2、ⅡＦ－1区で検出された、東西4間の柱穴列で、主軸方位は、N－88°－Eを測る。柱間は、西から、約2.45m、約2.55m、約2.5m、約2.5mを測る。

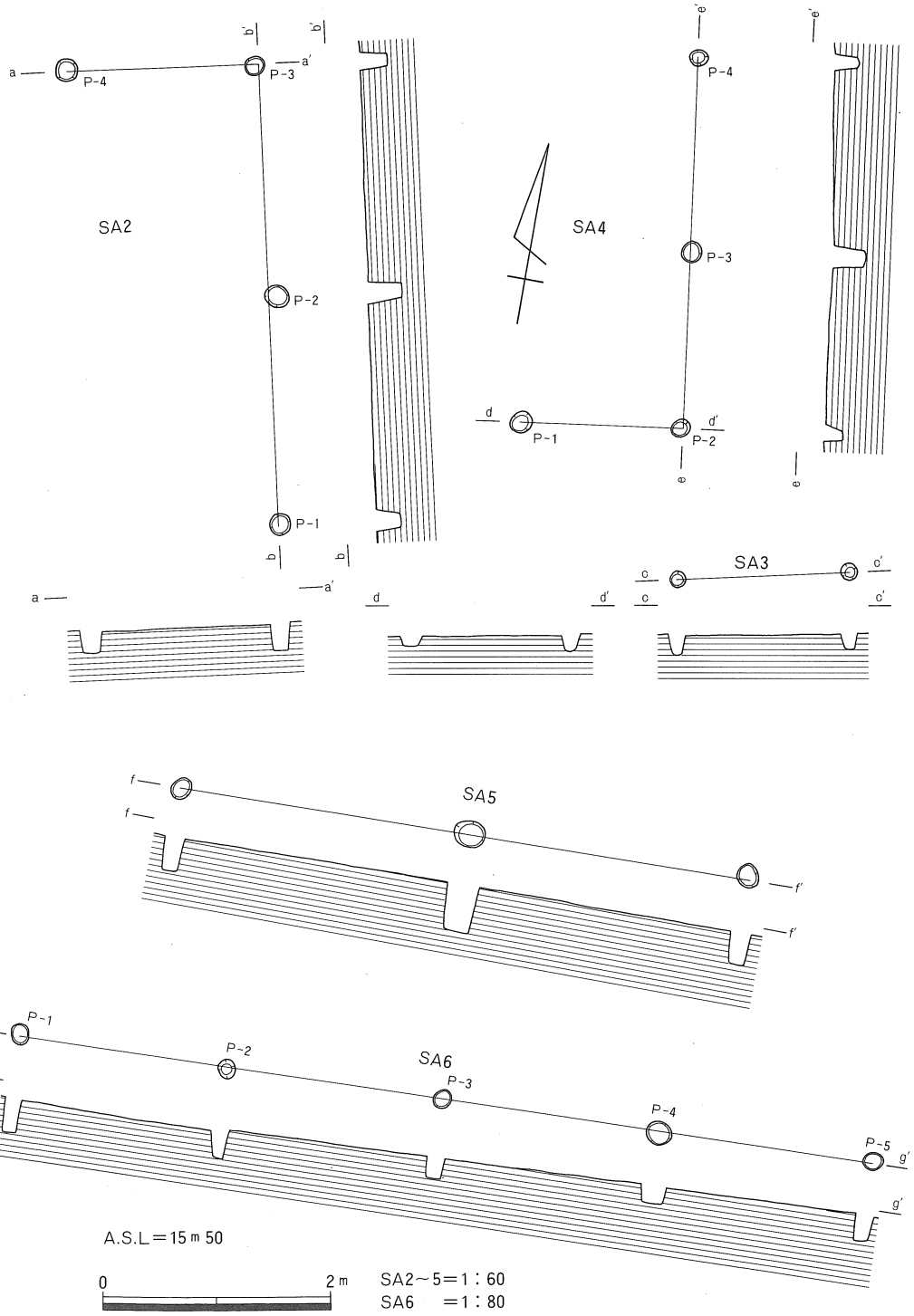
柱穴の掘方は円形・楕円形を呈し、径は、Ｐ－4が約30cm、他の柱穴は約20cmを測る。深さは、Ｐ－1が約30cm、Ｐ－2が約25cm、Ｐ－3が約20cm、Ｐ－4が約15cm、Ｐ－5が約25cmを測る。

Ｐ－1～Ｐ－5までを1条の柵列と考えたが、東半分の2間分の柱穴列がＳＡ5と平行に走ること、また、Ｐ－1・Ｐ－2が、Ｐ－3～5より約15～20cm深くなることから考えれば、Ｐ－1・Ｐ－2、Ｐ－3～Ｐ－5の2条の柵列に分かれる可能性をもつものと言える。

iii）土　　坑

ＳＫ3

ⅢＣ－4区で検出された。長径約1.3m、短径約75cmを測る。掘方は2段掘りになっており、



第11図　柵　列　実　測　図

最深約60cmを測る。

ＳＫ４

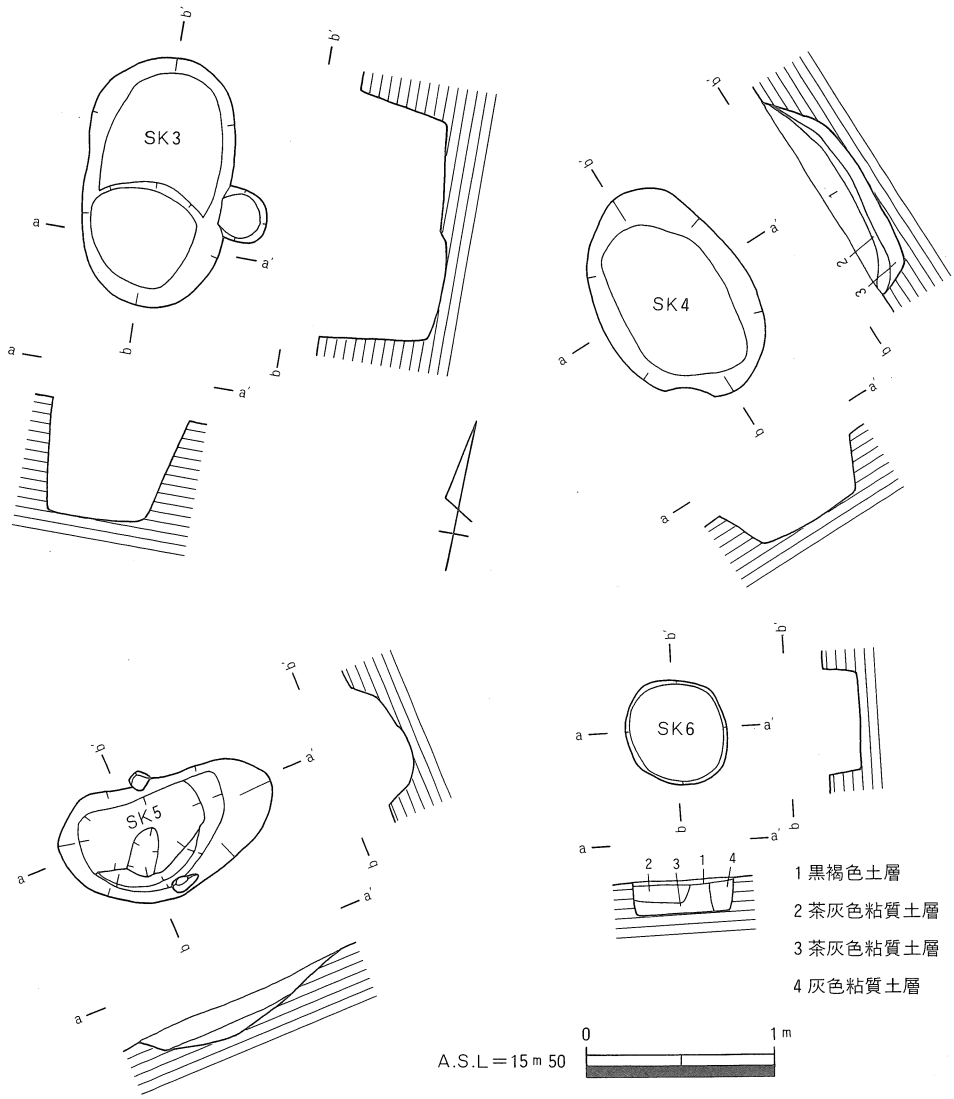
ⅡＤ－２区で検出された。長径約1.2m、短径約80cmを測る。深さは約25cmを測る。覆土は黒色粘土であるが、１層には砂の固まりが混じり、３層には灰色粘土の固まりが混じる。

ＳＫ５

ⅡＤ－４区で検出された。長径約1.15m、短径約65cmを測る。深さは約20cmを測る。掘方の断面形は、浅い皿状を呈する。

ＳＫ６

ⅡＤ－３区で検出された。掘方は円形を呈し、径約55cm、深さ約20cmを測る。柱穴の可能性もあるが、周辺で柱穴が検出されていないため、土坑として扱う。



第12図　土　坑　実　測　図

第３章　遺　　物

第１節　古墳時代の土器

古墳時代の土器は、第13図―１～12、第14図―13～29、第15図―30～38、第16図―39～44、47～50がある。１～42はＳＤ３から、43はＳＤ２から、44はＳＫ１から、47～50は包含層中から出土した。

ＳＤ３出土土器のうち１～12は、出土レベルから溝底面上と判断されるものである。13～20は、底面から若干浮いた状態と判断されるもの、21～34は覆土中からの出土と判断されるものである。35～42は、小グリッドごとに取り上げた土器である。

以下、古墳時代の土器を器種別に記述する。

須恵器杯蓋

13は口径14.3cm、器高4.5cmを測るが、天井部が陥没しており器形がゆがむ。天井部と口縁部の境に稜がつく。口縁端部の内面に不明瞭な段がつく。色調暗灰色を呈する。14は口径13.3cm、器高3.7cmを測る。稜は存在しない。口縁端部の内面に不明瞭な段がつく。15は口径12.2cm、器高4.8cmを測る。稜は存在しない。天井部の中央は回転ヘラ削り調整が施されない。21の口縁部はひずんでいるが、口径12.6cmと推定される。器高現存5.35cmを測る。稜は、明瞭な沈線で表現される。口縁端部内面に段がつく。色調暗灰色を呈する。22は口径11.55cm、器高4.5cmを測る。稜の下には、ヘラ状工具による明瞭な線がつくが、沈線化していると言える。口縁端部内面に沈線状の線がつく。23は口径11.6cm、器高3.75cmを測る。稜は存在しない。

須恵器杯身

１は口径11.3cm、最大径14.1cm、器高3.9cmを測る。底部は平底で、体部は強く屈曲し、垂直気味に立ちあがる。たちあがりの外面をナデ調整する。色調暗灰色を呈する。24は口径11.4cm、最大径13.6cm、器高現存3.9cmを測る。底部から体部まで丸味をもって立ちあがる。たちあがりは比較的長い。器壁は比較的厚い。25は口径9.5cm、最大径11.85cm、器高3.9cmを測る。平底の底部から、体部は丸味をもって立ちあがる。受部は短く、斜め上方にのびる。35は口径13.2cm、最大径15.4cm、器高現存2.9cmを測る。最大径が大きいことからすれば、有蓋高杯の杯部の可能性もある。受部は短く、たちあがりは長く直立する。36は口径11.6cm、最大径14cm、器高3.8cmを測る。底部は平底で、体部は強く屈曲し、垂直気味に立ちあがる。たちあがりは長く、直立する。37は口径11cm、最大径13.4cm、器高現存3.8cmを測る。受部は短く、斜め上方にのびる。器壁は厚い。38は口径11.5cm、最大径13cm、器高現存4.25cmを測る。体部は丸味を帯びる。受部は、わずかに認められる程度である。44は口径10.5cm、最大径12.7cm、器高4.2cmを測る。底部は平底で、体部は丸味を帯びる。たちあがりは比較的長いが、内傾する。47は口径8.8cm、最大径10.7cm、器高現存3.05cmを測る。受部とたち

あがりの境は平坦になる。器壁は全体に厚い。48は口径8.3cm、最大径10cm、器高2.7cmを測る。底部中央はくぼんでいるため、回転ヘラ削り調整が及ばない。底部は平底で、体部は内彎気味に立ちあがる。

須恵器高杯

2の長脚2段高杯は、脚部全体にカキ目調整を施す。透かしは3方にあけられている。下段の透かしは長方形を呈するが、上段の透かしは内側に貫通しているが、刻みをいれただけである。杯部の底部は平坦に作られている。底部と体部の境は強く屈曲する。43の長脚2段高杯の透かしは、上段・下段とも対角線上にあけられた2方向の透かしである。上段の透かしと下段の透かしは180°ずらしてあけられているため、上段の透かしを正面に向ければ、下段の透かしは真横を向くことになる。

須恵器甕

3は、体部上半から口頸部までカキ目調整を施す。注口は、体部最大径より上に位置するため、注口自体が若干斜め上方を向く。口頸部の基部は径5.1cmを測り、比較的太い。4は、体部に文様帯を有し、ヘラ状工具による刻みが施される。注口は、文様帯に穿たれている。文様帯の上下には、2条ずつ沈線がめぐる。回転ヘラ削り調整は、文様帯の下の沈線まで及ぶ。口頸部の基部は径3.8cmを測る。

須恵器甕

5は口径14.1cmを測り、体部内面に叩きが見られる。色調は赤茶色を呈する。50は口径18.7cmを測る。口縁部外面に断面の丸い凸帯がつく。凸帯の上はヘラ状工具で押さえ、下には沈線を施し、凸帯を際立たせている。体部内面に叩きが見られる。

須恵器鉢

39は口径17.5cmを測り、体部外面に2条の沈線がめぐる。口縁端部を平坦に作る。

須恵器埦

49は口径8.4cm、器高4.4cmを測る。底部は平底で、体部は丸味を帯びる。須恵器の杯身同様、受部とたちあがりを有する。

土師器杯蓋

6は口径13.6cm、器高4.1cmを測り、天井部は平坦に作る。天井部と口縁部の境はナデ調整を施すことにより稜を作る。口縁端部を丸く収める。口縁部内面にナデ痕がつく。7は口径13.8cm、器高4.25cmを測る。天井部を平坦に作り、天井部下にナデ調整を施し稜を作る。天井部外面に指頭圧痕がつく。口縁端部は尖り気味であるが、端部を丸く収めている。16は口径14cm、器高4.3cmを測る。天井部は丸味を帯びる。稜の位置は、6・7よりも下がっている。口縁端部を鋭く作る。

土師器杯身

26は口径12.6cm、最大径14cm、器高4.6cmを測る。底部は平底で、体部は丸味を帯びる。受部の内外面は丸味を帯び、たちあがりは長く、直立する。27は口径11cm、最大13.5cm、器高4.4cmを測る。底部は平底で、体部は直線的に立ちあがる。たちあがりは若干内傾する。

土師器杯

体部から口縁部にかけて丸味を帯びるものを土師器杯とする。8は口径10.7cm、器高4cmを測る。体部の内面に擦痕がつく。器壁は厚い。17は口径13.6cm、器高4.4cmを測る。内面は不定方向のナデ調整を施す。

土師器高杯

土師器高杯には、長脚と短脚の2種類が存在する。長脚の高杯には、9・18・30・40があり、短脚の高杯には、10・19がある。9の脚部内面には指で押圧を加えた痕跡がある、18の杯部底部と体部の境には稜がつく。脚部と杯部の接合部外面には指頭圧痕が付着する。脚部裾端部は丸く収められている。30は口径16.1cm、器高14.2cmを測る。杯部は深いものである。口縁部は軽く外反する。脚部裾は水平にひろがる。40の脚部裾は、30と同様、水平にひろがる。裾端部は丸く収められる。10は口径13.6cm、器高8.3cmを測る。杯部の体部は丸味を帯び、口縁部は軽く外反する。脚部の裾はほとんど開かない。杯部と脚部の接合部外面には指頭圧痕が付着する。杯部の器壁は厚い。19は口径14.4cm、器高8.9cmを測る。杯部の体部は丸味を帯びる。口縁部は体部から外反しながら立ちあがるが、口縁部は内彎する。脚部は比較的開く。

土師器甕

12は口径17.6cmを測る。最大径は体部にくる。体部外面は粗い縦位の刷毛目調整、内面は横位の刷毛目調整を施す。31は口径15.2cmを測る。体部に最大径がくる。体部外面には斜位の細かい刷毛目調整、内面には横位の刷毛目調整が施される。口縁部内面にヘラ状工具による刻みが見られる。駿東型の甕である*。32は口径17cmを測る。体部に最大径がくる。口頸部は長く直立する。33は口径17.8cmを測り、口径が最大径となる。頸部外面には斜位の細かい刷毛目調整体部外面には縦位の粗い刷毛目調整が施される。内面の刷毛目調整は、横位と斜位が交互に繰り返される。41は口径13.8cmを測り、口径が最大径になるものと思われる。体部の外面には斜位の粗い刷毛目調整が、口頸部内面には横位の粗い刷毛目調整が施される。器壁は厚く、作りは粗雑である。42は口径15cmを測る。体部に最大径がくる。口頸部は短い。頸部から体部の外面には縦位の細かい刷毛目調整が、内面には横位の粗い刷毛目調整が施される。

土師器台付甕

20は底径9.4cmを測る小形の脚台で、台付甕の脚と考えられる。脚部内面に指頭圧痕がつく。34は、体部中央と脚部を欠損する台付甕である。体部は球形を呈するものと思われる。口縁部はゆるく外反する。体部外面に斜位の刷毛目調整を施す。体部外面に煤が付着する。脚部基部は太く作られている。

土師器壷

11は口径20.7cmを測り、口縁端部を水平に外反させる。内面の頸部と体部の境は強く屈曲する。28は、口径14.5cm、最大径17.5cm、器高8.25cmを測る。底部は平底である。29は、口径8.2cm、最大径10.6cm、器高8.55cmを測る。体部外面の下端に指頭圧痕がつく。体部内

---

*）渡辺康弘氏の教示による。

面には擦痕が付着する。底部は中央がくぼんでいる。器壁は全体に厚いが、特に底部が厚く作られている。

第2節　奈良時代の土器

奈良時代の土器はＳＤ５から数点出土しているだけであり、他の遺構、包含層中からの出土はなかった。

第16図―45は、ＳＤ５から出土したもので、底部外面を回転ヘラ消り調整する。高台は低く、外側で接地する。底部外面に墨書がある。

第3節　平安時代～鎌倉時代の土器

須恵器、灰釉陶器、山茶碗が出土している。図示したもののうち第16図―46はＳＫ４から出土した。他は包含層中の出土である。

灰釉陶器

51は高台径9.7cmを測り、高台外側で接地する。器種は不明である。52は高台径6.2cmを測る。底部外面に糸切り痕を残す。高台端部は研磨されている。

山茶碗

53～55は小碗の底部である。54は底部外面に糸切り痕を残し、高台端部に籾殻痕がつく。55は底部外面糸切り後ナデ調整を施す。

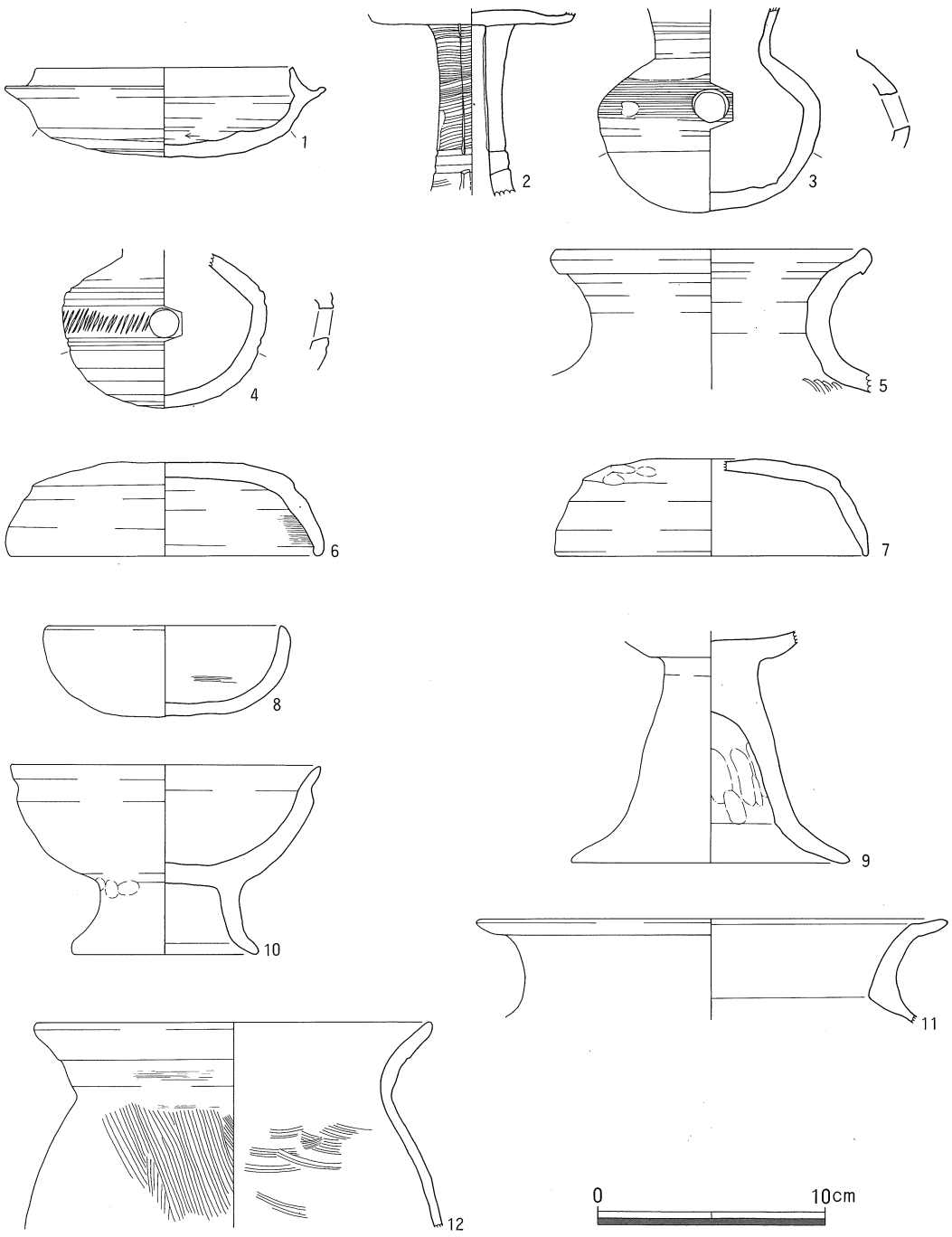
小皿は、46・56・57がある。46は底径５cmを測り、底部外面に糸切り痕を残す。56は口径9.3cm、57は口径10.7cmを測る。口縁端部は玉縁を意識して作られている。

58～62は碗の底部である。58は底部外面に糸切り痕を残し、高台端部に籾殻痕がつく。59は底部外面糸切り後ナデ調整を行なう。60は底部外面糸切り後ナデ調整を施す。底部外面の高台の内側に、断面「U」字形を呈する工具痕がつく。体部内面に黄緑色の釉がかかる。61は底部外面に糸切り痕を残し、高台端部に籾殻痕がつく。62は底部外面に糸切り痕を残し、高台端部に籾殻痕が付着する。

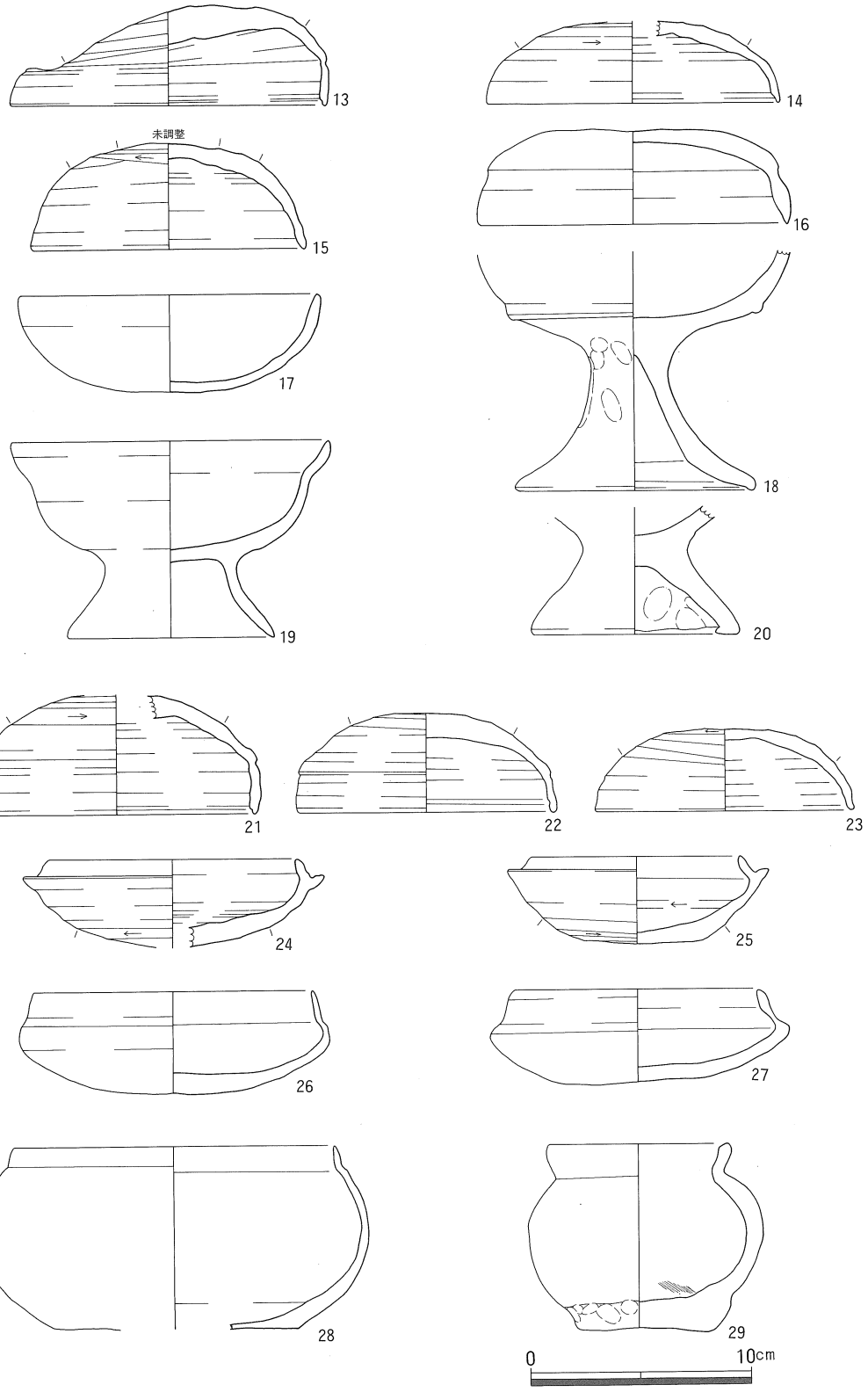
第4節　石　　器

ＳＤ３、ⅢＤ―２区Ⅱ層中から砥石が出土しているが、ＳＤ３から出土した３点を図示した。

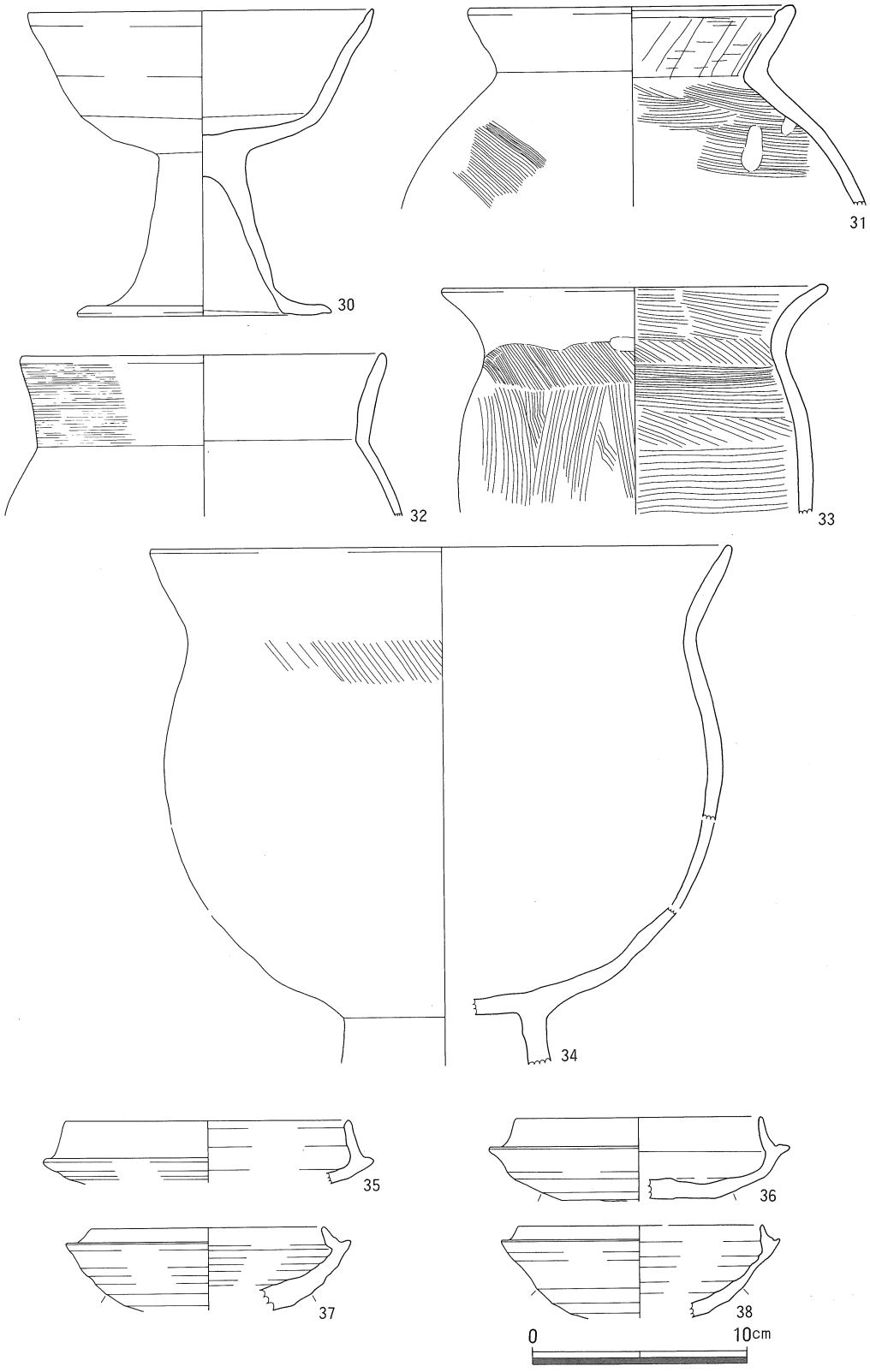
第17図―１は砂岩製で、全長11.2cm、幅4.5cm、厚さは中央で４cmを測る。両端に自然面を残し、４面を使用している。２は軽石製で、全長95cm、幅5.9cm、厚さ3.1cmを測る。形状は三角形を呈する。２ケ所を穿孔している。１ケ所は片側から穿孔しており、もう１ケ所は両側から穿孔している。３は軽石製で、全長7.2cm、幅4.7cm、厚さ4.8cmを測る。数ケ所に断面「Ｖ」字状を呈する擦痕がみられる。また、全面（８面）に凹面がみられ、あらゆる角度から使用したことが窺われる。



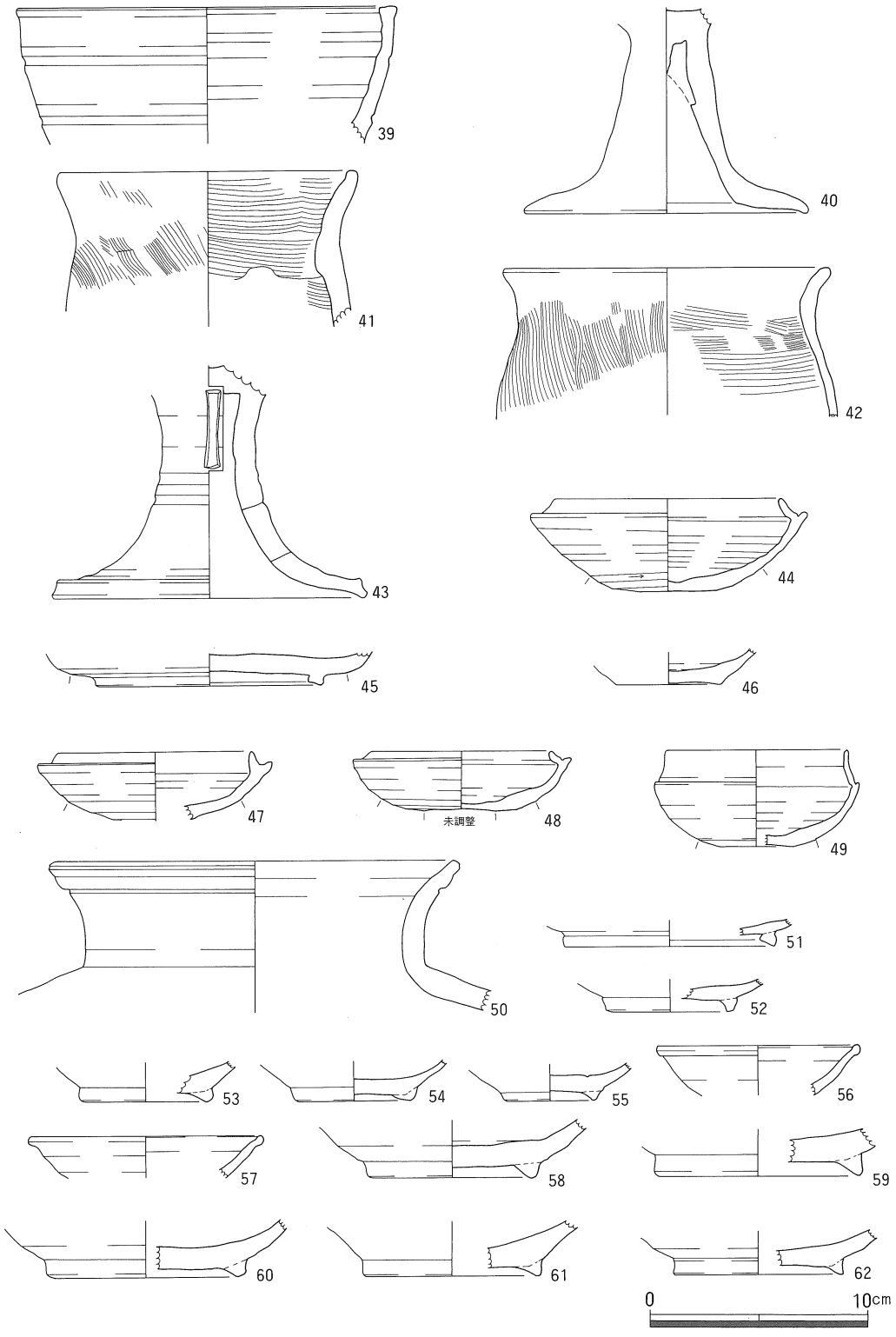
第13図　出土土器実測図（１）



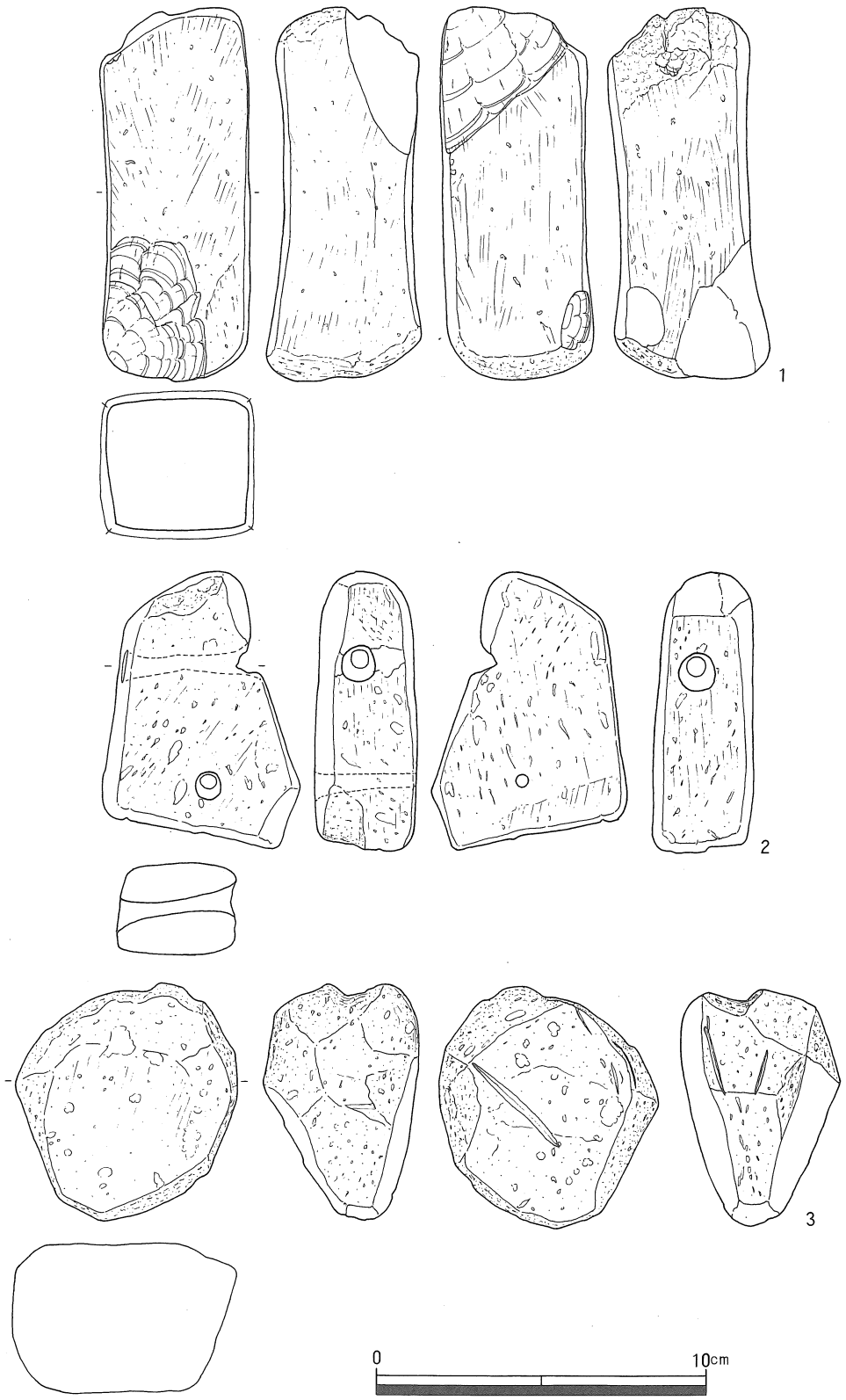
第14図　出土土器実測図（２）



第15図　出土土器実測図（３）



第16図　出土土器実測図（４）



第17図　出 土 石 器 実 測 図

第４章　まとめにかえて

今回の調査では、古墳時代後期、奈良時代、平安時代～鎌倉時代の遺構を検出した。遺物も各時期のものが出土したが、古墳時代後期の資料が最も充実している。

古墳時代後期の遺構は、溝状遺構、土坑、竪穴状遺構がある。溝状遺構ＳＤ３からは、遠考研編年の第Ⅲ期中葉～後葉に比定できる須恵器が出土しており、６世紀後半から７世紀前半代に該当するものと考えられる。第13図―１、第15図―36は、群集墳からの出土遺物のなかに見ることのできない須恵器であり、少なくとも群集墳が成立する前段階に位置づけることが可能である。他の資料は概ね、群集墳の成立時期のものと言える。また、包含層中からは、遠考研編年の第Ⅳ期前半に比定できる須恵器が出土しており、ＳＤ３の埋没後も生活の場となっていたことが窺われるが、竪穴状遺構の時期が明らかにできた時点で、いくらか解明できるものと考える。

奈良時代の遺構は、溝状遺構、掘立柱建物、柵列がある。溝状遺構ＳＤ５からは奈良時代末に比定できる須恵器が出土しており、容易に時期を決定することができた。しかし、ＳＢ１・ＳＢ２・ＳＡ１の柱穴掘方からは、古墳時代後期の須恵器片・土師器片が出土しているが、奈良時代の土器片は出土していない。また、包含層中からも奈良時代の土器片は出土していない。平安時代～鎌倉時代の遺構でないことは、柱穴内の覆土から容易に判断できた（平安時代～鎌倉時代の遺構の覆土は暗灰色を呈する）。したがって、古墳時代後期か奈良時代のどちらかと思われるが、柱穴掘方から古墳時代後期の土器片が出土するのは、建物・柵を建てる時に散布していたためと判断して、奈良時代の遺構として扱った。

また、ＩＣ―３・４区、ⅡＣ―１・２区でまとまって検出された隅丸長方形を呈する掘方の柱穴も、奈良時代に属する可能性があることを指摘しておく。

平安時代～鎌倉時代の遺構は、掘立柱建物、柵列、土坑がある。これらの時期は、包含層中からの出土土器によって、12世紀前半～13世紀前半に位置づけることが可能である。柵列は、１間～４間と短く、また「┐」、「└」型を呈するなど、何のための柵なのか、今後検討する必要がある。土坑については、ゴミ捨て穴的な性格を考えている。平安時代～鎌倉時代の、掘立柱建物、柵列、土坑は、分布を異にしており、３者を有機的に結び付けることは困難であるが、この点も、今後検討する必要があると考える。

参　考　文　献

大谷純仁他　1968　「掛川市岡津横穴墳Ｂ群発掘調査概報」『東名高速道路（静岡県内工事）関係埋蔵文化財発掘調査報告書』　静岡県教育委員会

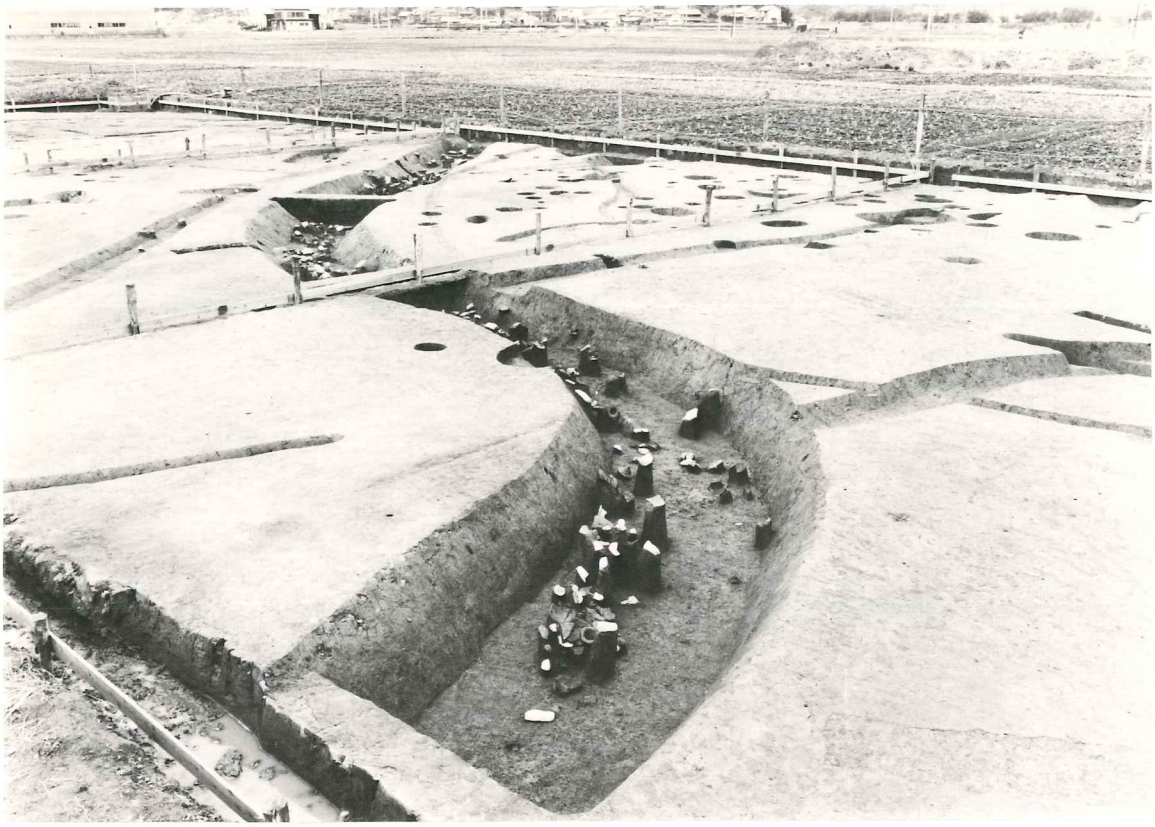
内藤　晃他　1979　『静岡県周智郡森町観音堂横穴古墳群発掘調査報告書』　日本楽器ＫＫ

山村　宏他　1966　「大沢・川尻古窯跡調査報告書」『遠江考古学研究会学報』第３集

図版 1

調査区全景完掘状況（東より）

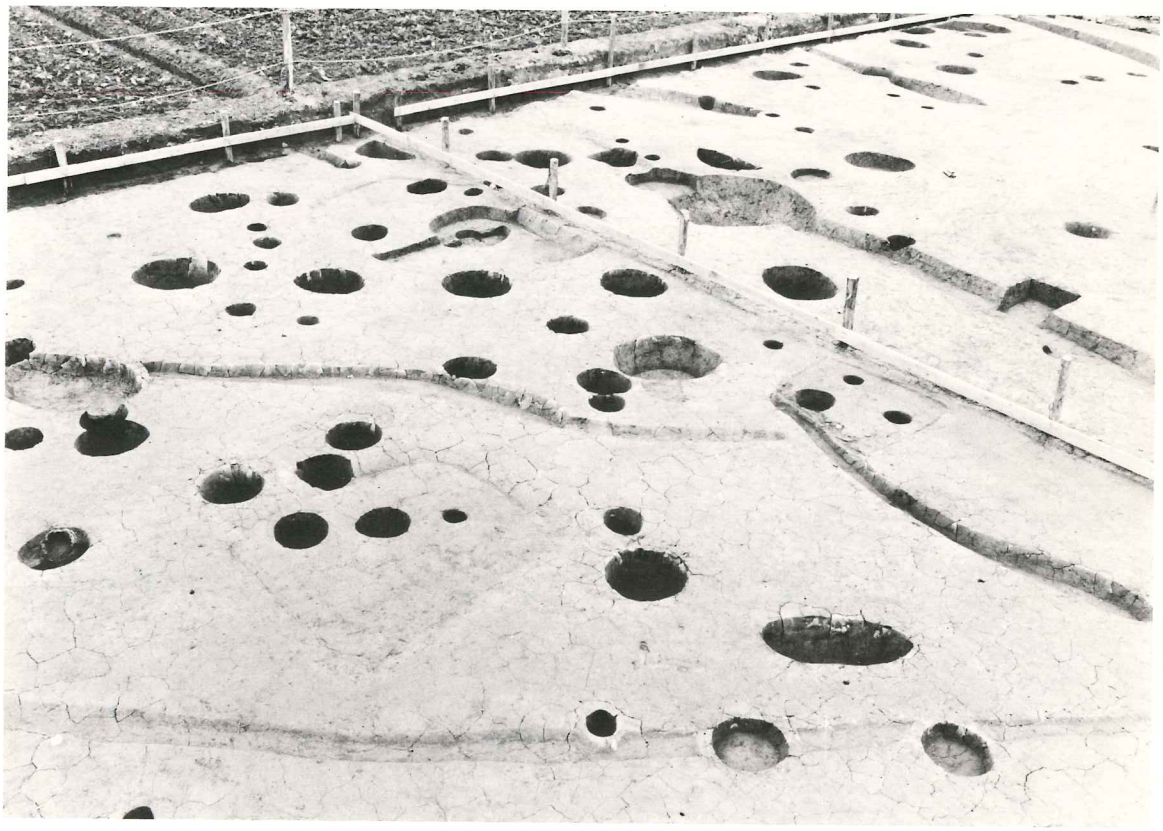
II・IIIＤ区、II・IIIＥ区、II・IIIＦ区完掘状況（西より）



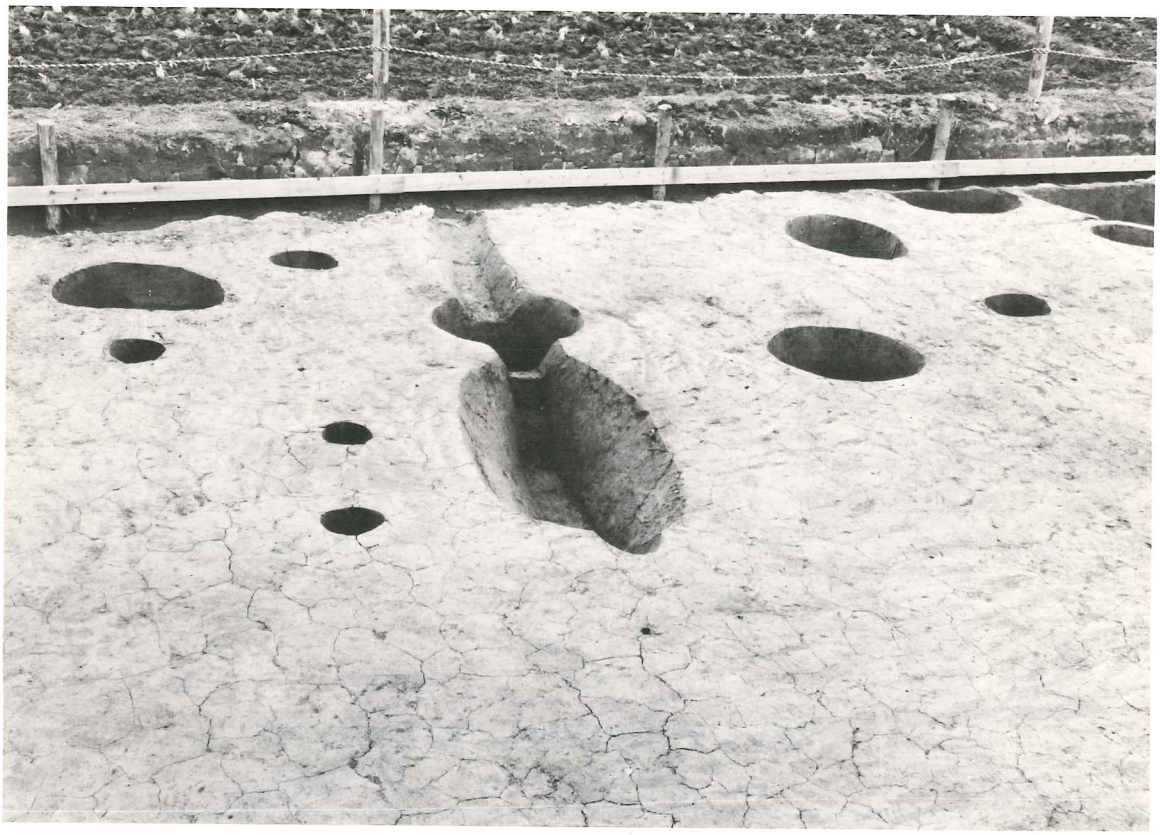
ＳＤ３全景（南より）

ＳＤ３内遺物出土状況（ⅢＥ－１区、東より）

図版 3

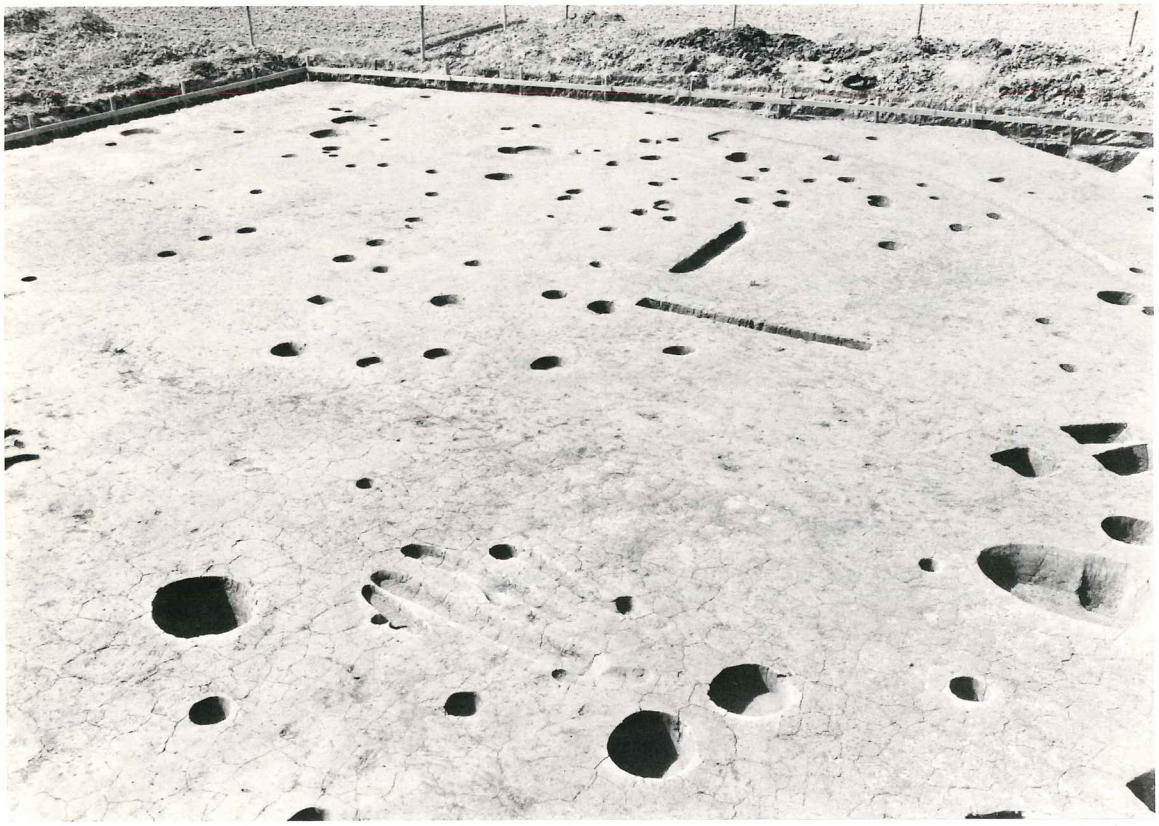


ＳＢ１近景（南より）



ＳＢ２近景（南より）

図版4



ＳＢ３・ＳＢ４遠景（東より）

ＳＢ３近景（北より）

ＳＢ４近景（北より）

坂　尻　遺　跡

—昭和57年度㈱大庭塗装工業所北原川
作業所建設工事に伴う緊急発掘調査概報—

1983年３月31日

編　集　　袋井市教育委員会

印刷所　　株式会社　開　明　堂